



「農福連携」を通じて、障害者の雇用と自立、農業の担い手不足の解消という地域課題を解決する、Win-Winの関係づくりに取り組んでいます。

PROFILE

事業類型:福祉事業所 (A型)

代表者名/奥野靖夫 (おくのやすお) 理事長

社員・スタッフ/9名 利用者/8名

事業概要

・施設外就労:畑作 (露地栽培):

大根/じゃがいも/オクラ/玉ねぎ/コネギ/空心菜/唐辛子

・ハウス:いちご/トマト 市場内選果作業 等

・自社農場の整備を計画中

農福連携をはじめたきっかけ

・学生時代に高齢者施設でアルバイトした経験から社会貢献できる仕事として福祉業界へ。

・利用者が成長しみんなで働ける場所が農業であることに気づき、自然に触れることによるレジリエンス (回復) 力の可能性を見出した。

沿革 (画期区分)

平成28年 (2016) ~ ・事業開始。女性スタッフ5名でスタート。

平成30年 (2018) ~ ・自社園圃取得。・農事組合法人S農園と契約 (2年目)。

令和2年 (2020) ~ ・既存のA型事業を事業承継。

・事業拡大。良い作物を育てるための土壌成分について学ぶ利用者も出てきた。

・ノベルティグッズを製作できる印刷機を導入。

・2021年にB型を設立し、経営安定化をめざす。

・自閉症スペクトラムの利用者を、野菜集荷・配送・納品担当職員として雇用予定。

・利用希望者の交流拠点 (コミュニティカフェ) も整備予定。いずれはアニマルセラピーも。

翔のマッチングストーリー

野球で培ったチームビルディングの経験

奥野理事長は地元大学の理系学部出身。高齢者サービスのアルバイト経験をきっかけに福祉事業へ。学生からの野球経験が現在の利用者とスタッフの垣根のないチーム育成に役立っている。その縁が市役所福祉課職員や他事業所との人脈形成にも。今も障害者と健常者が共に野球を楽しめるサークル活動を熊本市内で継続している。昨今では市内各地区で事業所を運営する若手経営者や行政職員等と新たなネットワーク (福祉改革のための任意団体) 構築に向けて活動を開始した。

偏見や差別は俺たちで変える!

地域社会において、障害者はいらない・お荷物という偏見や差別を、当事者の就職先を探す際に奥野氏自身が痛感してきた。口先だけでなく、実力をつけて自立した生活を送れるような人材を輩出することで、偏見や差別をなくしていきたいというのが原動力に。その結果、口コミであちこちの農家から手伝いに来て欲しいというオファーが来るようになった。



体育会系のノリで行う独特の支援方法

挨拶・返事は社会人としての基本、施設外就労先でも最低限のコミュニケーション基礎であると徹底し、仕事でのミスへの言い訳にも厳しく指導を行ってきた。第三者には奥野理事長の熱血指導は時代に逆行しているように見えることもあるが、利用者との信頼関係を構築した上で敢えてそのスタイルをとっている。結果、現在では多くの利用者出身のスタッフが存在する。

利用者との信頼関係の構築

当初、施設外就労先から「障害者に農業は大変だ」という声は多くあった。農家からクレームが来た時には奥野理事長が真っ先に話を聞きに行き、利用者にもその内容を説明し、時間をかけて信頼関係を築いてきた。スタート当時から園圃で活躍するスタッフは農業未経験の女性を中心であり、肉体的に屈強である必要がないことの証明でもある。農作業を通じて良い変化を遂げた利用者が増えれば増えるほど、それが実績となり遠くは他県からも問い合わせがあるほど反響が出てきた。自分を変えたいと翔の門を叩いた農業未経験の利用者にとって、最初の1~2ヶ月は普段行わない動作や姿勢、単調な反復作業など肉体的にも精神的にも本当に辛いが、利用者/スタッフ皆がフォローしてくれる環境が形成されている。

翔のマッチングポイント

1 マッチングの形態

利用者の個性や希望等を考慮し適材適所。

2 その発展過程

利用者と向き合い、その得意分野を見出し、それを活かせる現場作業をマッチング。

3 行政による財政的・人的支援

現在はないが、連携についての議論等を開始。

4 農業関係団体・福祉関係団体との連携形態

定期的な情報交換。

5 マッチングの対象

地 域:熊本市周辺 品 目:上記概要参照

利用者:精神障害者等

6 コーディネーターの育成方法

奥野理事長を中心に、スタッフや利用者同士の支え合いによって、利用者と農業現場のコーディネートを行なっている。

